一證差でもあらう。言葉を換へていへば、坊さんなど社會ではどうでもよいと思つてゐる、とも見られる。何かと、對手にされたり、したりするやうになるのは、今日學校に在るものが廣い教養と深い智識を得る覺悟がなされなければならないだらう。即ち「外道の書」を多く讀むことである。

# おもひつくまゝ

## ――宣撫通信――

小崎龍雄

私が昨年三月內地を出て上海に上陸して、馴れない支那の然も法衣を脫しての陣中生活に戸惑ひしてゐたのが今では特務班としては古顏になり、所謂宣撫班長を津浦線の滁縣で半ケ年、此の廬州へ來てから三ケ月も勤める樣になつたのだから短い間の變化に今昔の感に絕へないで居るのも無理からぬことである。

實に我々の從事して居る仕事は難しい、支那語も日常不自由はしないでゐるけれど、いざ大會をしたり縣公署とか、警察署で訓辭をしたり講演をする時には通譯なしでは出來ないし、御存じの通り凡てが慢々的な連中だから、こちらで云ふ事業の三分の一もしないし、次から次へと事態は變つて來るし、會議等で南京とか蚌埠とかに十日近く出張をして歸任して見ると支那側の機關は殆んど停止して居る狀態だし、匪團、遊擊隊は橫行する、情報を確實にせねばならぬ等まだ〳〵筆に出來ぬ事がいくらもある。然し一方我々の造つた大民會其他多くの民間團體は相當に活躍して呉れて居る。殊に最近は汪精衞の和平聲明が租界にまで影響して居る爲か一般民衆が和平

救國に就いて眞摯な態度になつて來たことは見逃せない事實だ。

各地とも反英若しくは中央政權樹立促進運動或は和平救國等の大會が熱烈に行はれて居る。こちらでも一昨日二十五日合肥縣民和平救國大會が行はれ、私も出席して其の盛んなのに驚いたが、更に旗行列、夜はまた提灯行列等して其もいろ〳〵趣向を擬らしたものばかりで事變後こんな賑やかなことは始めてゞ城民は老若男女狂喜して街々を練り歩いた。明日は警備隊長と某方面に出かけるのだが、これにはすばらしい佳話がある。明日行く○○は此の附近で有名な大土匪の本據で、之を占領すると共に我々が直ちに入り宣撫工作を爲し、村長、主任も本部で選定して連れて行き、保甲制度とか、自衛組織を造らせ更に廬州から○○までの遠い道が餘り狹くて自動車の運行が不可能なので、之が新設を命じて置いた所、彼等だけで一錢の金も要求せず完成させて了つたのだ。其で私も警備隊と連絡して、明日は道路開通式と村長、主任の表彰を行ふことにした。それのみでなく五千圓程を地方開發の資源として彼等に與へることにしてゐるのだから、彼等も一層感激することだらう。とにかく今まで匪賊とか遊擊隊になやまされてゐたものが一度皇軍の恩惠に浴し、我々の眞意が分ると積極的に日本軍と警備隊の將校が夜間巡察に協力してくれる。

外に出て暗がりの中で一老百姓が何かしてゐるので怪しい者と思つて部下に誰何させると、良民證を示して言葉が通じない爲手眞似で道路を直して見せたので其の意味が分り兵達は今更の樣に驚いて少い煙草を出し合つて老百姓に與へ歸つて來たと云ふが、かくしてこそあの長途の道路が知らぬ間に出來上つたのであり、實に涙ぐましいことであると其の將校が私に話して呉れたが、かうした美しい話は相當あるのである。

私のところへ毎日遊びに來る六人の女の子達はとても可愛らしい、公務が忙しいので十六時から一時間だけお友達になつて支那の歌を唄つたり、日本語を教へたりし

て居るが、近ごろはとても日本語が上手で彼女等を相手にして居る時は支那に居る感がしない。其の中一人でも病氣をしたり、用事があつたりして來ない時は何となく心配で次の日は出來る限り暇を見付けて訪ねてやると非常に喜んでくれ、私としても安心する譯である。

私はそれから支那々々と書いて來たが、一般に支那と云はれることを支那人は喜ばない、其で私は講演をする時でも普通話をする時も中國と云ひ、中國人と呼稱して居る。であるから、これからは中國として書かう。

中國の家庭は奥深い、其と門が幾つもあり土壁或は煉瓦壁で幾重にも廻らされ、中流以上（中國には中流階級は無いと云ふ人があるが私はこれを取らない）の家庭では女は何も仕事をしない、たまに自分の靴を造つて居るのを見る外多く使用人任せである。使用人も程度に依り十元位から下に少しづゝの差があり無料で住み込んで居るのもあり、日本人は餘り拂ひ過ぎるらしい。

殊に面白いのは仕事が決つてゐて私のところで五人使用してゐるが、小孩（給仕）二人を太郎、次郎と名付けてるが給仕の用しかせず、苦力は掃除、炊事夫は炊事、阿馬は洗濯のみで然も小孩が一番上らしく大人を呼んで使つて居る。これなどは一寸奇異な感じがするけれど中國に馴れて來ると何でもなくなる。其と中國人は日本で云ふ御世辭無く、巧言令色鮮仁で上流の人程其の心を見極めるのが困難であり、我々の樣に積極的に要人連と會ふものは之で失敗することが多い。其の外何の場合でも宴會をしたがり、日本に居るうちは宴會等稀にしか出なかつたが中國に來てからは大きなのだけでも月に四、五回はあり全部では數も分らない程で、無暗に乾盃、乾盃をやられるので酒の方は負け勝である。

何うも思ひつくまゝとは云ひ乍ら勝手な辯ばかりで恐縮ですが、日本佛敎の進出も現在あらゆる方面で歡迎されて居るのですから、日持聖人の覺悟を奉持して二陣三陣と大陸目がけて進出することを望んで止みません。先日十六日に班員が一人名譽の戰死を遂げ、私としては彼

の爲めにも一層頑張らねばなりません。愈々不惜身命の聖訓に遵じ御奉公に專念致します。

（一四、七、二七）
八月十三日編輯室到着檢閲濟航空便

# 護法の理念とその展開

田中泰勵

私共の生存してゐる世界に於て、人間精神の表面的なる智識を以て、人生に對する態度、それを以て能事終れりとなす事は近代文化人の特長であるかも知れぬが、それは又、大きな缺点でもあらう。丁度それは意氣込んでものを云ひ、大言壯語を立前へとしてゐる人間程、自信のないのを暴露する事が多いのを見る樣なものである。而して常に種々の智識を求める人間の智識欲、そして得られるものに就て觀るに、將してそれが眞の滿足を齎すかと云ふ判斷は自己そのものである。換言すれば、外界に何物かを求め奔走してゐる私共は純粹なる自己を探索してゐる事に氣付くのである。凡そ實相と云ふものは夫れ自身が示すものであつて、私共がそれの知覺に感心してゐる場合、その實相でないと云へば、これは詭辯であらうか。私は一念三千の云ふ法門に對して、人間が己れの腦髓の組織とその作用に何時も驚嘆してゐるだらうかと誰人にも尋ねて見ようとする衝動に馳られる。且つ此處に横はつてゐる「聲色の近名をたずねて無相の極理に入る」と云ふ宗教の概念の世界は、人間の事實批判の外に沈默してゐるのみで、一切の論理も同じくその世界の價値について沈默して了ふだけで、法の意義を解釋して